

2026年度新社会人入職研修を 開催しました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2026年5月11日（月）、12日（火）の2日間、東京の神保町にて新社会人入職研修を開催しました。理事長講話では医療人に求められる「責任」について講話し、社会人・医療人としての心構えや仕事への向き合い方を学んでもらいました。

会場となった一橋講堂には、すでに4月から全国の各病院や施設で働く新入職員118名が集まりました。講義やグループワークを通して、社会人・医療人としての心構えや、日々の仕事への向き合い方を学んでもらいました。

また、私からの理事長講話に加え、プロスキーヤーの井山敬介さんによる「プロに求められる人間的な魅力」についての講演も行われました。

午前の部では、人材育成のプロである株式会社ビーフォーシーの相部博子先生より、「社会人への意識転換・医療者に求められる対人力・仕事の進め方」についての研修が行われました。

自ら主体的に行動する「前に踏み出す力」、物事の疑問や方法を自分で「考え抜く力」、チーム内の信頼関係を築き行動する「チームで働く力」の3つを身に付けるトレーニングを行いました。



午前の研修の後には、皆さんに健育会グループの歩みについて知ってもらうため、70周年記念式典の映像を放映しました。

続く理事長講話では、私から新入職員の皆さんへ、社会人として、また医療・介護に携わる者として必ず守るべき「責任」について話をしました。



本日は、社会人・医療人になったばかりの皆さんに、これから絶対に遵守してもらいたいことについてお話しします。

医療・介護の世界では、ほんのわずかな意識の低さが重大な事故に繋がりがねません。医療従事者である以上、今日お話しすることは一人ひとりが必ず徹底するようにしてください。

皆さんにはまず、一般的な「社会人としての責任」と、医療・介護に携わる「医療人としての責任」。この2つの重みについて正しく理解していただきたいと思います。

では、具体的に「社会人としての責任」とは何なのか、順を追ってお話ししていきます。

皆さんはまだ社会人になったばかりですが、現場の患者さんやご利用者から見れば、ベテラン職員も皆さんも同じ医療従事者であり、区別はつきません。そのため、業務の中で何かを尋ねられる場面も当然出てきます。

そのような状況で皆さんに求められるのは、「できないことを曖昧にしない」ことです。

もし判断に迷う質問をされた時は、その場しのぎの返答は絶対にせず、「上司に相談して参ります」と伝えてください。そして自分では判断できなかった情報をいち早く上司に伝達する。こうした対応を取ることが、現在の皆さんが担うべき責任です。

「できないことは、できないと伝える」「いち早く情報を上司に報告する」この2つを必ず徹底してください。



次に、医療・介護に携わる者としての「医療人としての責任」についてお話しします。

皆さんが行う日々の業務は、患者さんの身体に触れ、手術の介助をし、点滴や輸血のために針を刺すなど、見方を変えれば「傷を与えること」に他なりません。

また、薬の投与も、身体に大きな変化をもたらす非常にリスクの高い行為です。

薬という毒を扱い、メスを入れて傷をつける。こうした医療処置は、本来であれば「傷害罪」にも相当する行為です。

これらの処置を行っても皆さんが罪に問われないのは、人の命を救うという大目的があり、国家資格というライセンスを所持しているからです。

皆さんの日々の選択や行動は、それほど重い責任の上に成り立っています。

自分たちが患者さんやご利用者の生死に関わる、責任ある立場にあることをしっかりと理解してください。

医療の現場において、「うっかりしていた」というような過失は決して許されません。

上の空で患者さんやご利用者と向き合うことは、その方の命をないがしろにしていることと同じです。必ず全身全霊で向き合い、目の前の業務に集中することを徹底してください。

今お話しした「社会人としての責任」と「医療人としての責任」の2つは、必ず認識しなければならないものです。この2つの責任を理解して初めて、皆さんは医療・介護の現場に立つ資格を持つことができます。

この責任をないがしろにした場合は、新入職員に限らず、長年現場を経験してきたベテラン職員であっても、厳格に注意し処分を下しています。

自分たちは人の命に携わる、厳しい職業に従事しているのだという自覚を、強く持ってください。



次に、健育会グループが独自で行っている取り組みや、理念についてお話しをさせていただきます。

まずは「医療人としての使命感」についてです。

働き始めたばかりの皆さんの中には、医療人としての使命感がまだ十分に育まれていない方もいるかもしれません。

私も医師になったばかりの頃は、使命感を明確に意識することはできませんでした。しかし、大学病院で勤務する中で、目の前の仕事と並行して厳しい勉強をし、また研究に励み、上司や患者さんから認められ、お褒めの言葉をいただくことによって、徐々に医療人としての使命感が芽生えていきました。

健育会グループでは、皆さんの使命感を育てるための勉強の場を数多く提供しています。

その一つが学会や研究発表の場です。職員の皆さんは日々の業務の傍らでそれぞれの研究を進めています。

毎日の忙しい仕事の中で学術活動を行うことは、非常に厳しいことだと感じるかもしれません。私自身も、大学病院で勤務しながら研究に追われていた時期は、その目まぐるしさにさいなまれていました。

しかし、研究を行うことで医療従事者は「科学者としての論理的思考」を身に付けることができます。

論理的思考は、患者さんやご利用者の治療・ケアを行う上でとても重要です。データや数値に基づいた冷静な判断は、目の前の方々を回復に導く大きな成果をもたらしてくれます。

日々の勉強や研究は、患者さんやご利用者の治療に貢献するためにある、ということを常に念頭に置いて取り組んでください。

自分の持つすべての知識を総動員し、更なる回復を促すために文献を調べては分析し、多角的なアプローチを試みる「飽くなき探究心」が、皆さんの医療人としての使命感を育てていきます。

また、健育会グループでは「病院の運営」や「質の向上」に貢献した職員を称える「理事長賞」という表彰制度を設けています。

日々の勉強も大切ですが、自分自身の行動を誰かに認めてもらえたという達成感も、医療人としての使命感を育てる上で大きな力になります。

健育会グループには、頑張った人をきちんと評価し、組織全体で称賛する環境があります。ぜひ、全力で日々の業務に取り組んでほしいと思います。



次に、健育会グループが取り組んでいる「Our Team経営」についてお話しします。

健育会グループは全職員参加型の「Our Team」による経営を行っています。

自分が所属する部署のことだけでなく、別の病棟や施設の経営についても全職員が共に考え、工夫を凝らし、より良い方向へ導いていく体制を取っています。

財政状況が厳しさを増す昨今の医療業界において、有事の際にも全員で支え合える「チーム医療」が確立された病院こそが真の価値を生み出します。

実際に、新型コロナウイルスのミニクラスターが発生した際、職員の人手が不足して患者さんへの配膳が間に合わなくなるというピンチを迎えました。そのとき、職員たちは率先してサポートに乗り出し、事務職や理学療法士などが配膳を担ってくれました。

健育会グループではこのように、誰かが困っているときには職種を越えて互いを助け合うチーム医療がしっかりと確立されています。

また、「Our Team経営」には「安全」「確固たる経営」「愛情を持って親身な対応」という3つの要素が含まれています。

これらの要素は順番が極めて重要です。まず第一に、患者さんに対して確実な医療を提供する「安全」が求められます。次に、経営基盤が安定し、職場環境を改善できるような「確固たる経営」を確立します。そして、これらの環境が整い、職員の皆さんに心の余裕が生まれたとき、「愛情を持って親身な対応」を行うことができるようになります。

働き始めたばかりの皆さんが、すぐに「Our Team経営」の本質を理解することは難しいかもしれません。まずは、患者さんやご利用者、そしてそのご家族、業務に関わるすべての人たちにしっかりと挨拶をすることから取り組んでください。



最後に、「人間の尊厳は皆、平等である」ということについてお話しします。

世間ではよく「人の命は平等である」と言われますが、実際に医療・介護の現場に立っていると、その理想を実現することがいかに困難であるかを痛感させられます。

私自身、社会的な立場の違いや状況、タイミングなど、さまざまな理由によって、現実には人の命が平等に扱われていない場面を多く目にしてきました。

しかし一方で、「人間の尊厳」は常に平等に扱うことができます。子どもであっても、高齢者であっても、あるいは障害があったとしても、すべての人にそれぞれの尊厳があります。

健育会グループは長年、患者さんやご利用者の尊厳を尊重し、その人らしく過ごしていただくための環境を提供してきました。このあり方は医療人の使命だと考えています。

健育会グループが掲げる「人間の尊厳は皆、平等である」という理念は、すでに多くの職員の心に深く浸透しています。

「口から食べる、尿意・便意を自覚する、立位・歩行ができる」。患者さんやご利用者が、これらの行為を自立して行えなくなってしまったとしても、私たちは全力で向き合い、以前の姿を取り戻すことができるようなサポートを行っています。

いかに症状が重かったとしても、その患者さんの生き方や尊厳を尊重し、その人らしい生活へと導く。

皆さんも、患者さんが100人いれば100通りの方法でその方の尊厳を敬い、常に平等に接するよう心がけてください。

健育会グループには、他の病院や施設とは異なる独自の考えや方針があります。皆さんが仕事に慣れた半年後、健育会グループが何を考え、どこを目指し、どのような組織であるのか、改めて私から直接お話しをさせていただく予定です。

本日お伝えしたことをしっかりと受け止め、半年後に医療人として立派に成長した皆さんと再びお会いできるのを、心から楽しみにしています。

その後、プロスキーヤーの井山敬介さんより、これから医療のプロフェッショナルを目指す皆さんへ向けて、本物のプロならではの格言や、困難な場面に直面したときの振る舞いについてお話ししていただきました。



私はかつて、アルペンスキー選手として活躍し、高校時代にはナショナルチームに所属してワールドカップへ出場した経験があります。

アルペンスキーの道を極めようとする中、二十歳のときに原因不明の病に罹り、その影響で日本代表の道を断念し、競技選から離れることとなりました。

以降、働きながら技術選での活動を目指す方針に決めましたが、当時は就職氷河期まっただ中の時代。理想とする企業に就職することもできず、厳しい経済状況の中で日々を過ごしました。

資金面の問題でトレーニングジムに通うこともままならず、仕事が終われば近くの公園でトレーニングをし、河原で拾った大きな石をダンベル代わりにして筋トレをするような毎日を送っていました。

病に侵され、職探しにも苦しみ、まともなトレーニング環境にも恵まれない。世の中は理不尽なことばかりだと感じましたが、私は決して諦めませんでした。

次第に、真摯にスキーへ打ち込む私の姿を見てくださった方々が、スポンサーとして支援をしてくださるようになりました。

それから決して諦めずに挑戦を続けた結果、全日本スキー連盟が主催する、総合的な滑走技術を競う「全日本スキー技術選手権大会」で、幾度も優勝を果たしました。

努力をしている人に対して、手を差し伸べてくれる人はたくさんいます。しかし、その手をしっかりと掴み取るためには、自分の力で茨の道を切り開いていかななくてはなりません。



また、真のプロフェッショナルになるためには、ただ技術を磨くだけでは不十分です。プロの世界に立つためには「人間的な魅力」が必要です。

たくさんの大会に出場する中で、技術はあるものの「何か輝きが足りない」と感じる選手を多く見かけました。その理由を模索していくうちに、彼らには、自分自身を磨くことで培われる「人間的な魅力」が足りないのだという結論に至りました。

音楽プロデューサーの蔦谷好位置さんにその話をすると、アーティストの世界でも、演奏はとても上手いのにステージに立つと途端に魅力が薄れるグループもいれば、技術はピカイチではなくてもステージに立った途端に輝き出すアーティストもいる、とおっしゃっていました。輝いている彼らは皆、常に自分自身と向き合っている、人間的な魅力がある人たちばかりだそうです。



私は幼少期からスキーに触れ、絶え間ない努力をしてきましたが、数え切れないほどの理不尽な出来事にも遭遇してきました。人は誰も、生きていく中で上手くいかないことに必ず直面します。

「ピンチはチャンス」という言葉をよく耳にしますが、現実には「ピンチの後には大ピンチ」が待っているものです。

皆さんがこれから医療人として過ごしていく中、大きなピンチにさいなまれることもきっとあるはずです。もしその時が来たら、目の前のことに一生懸命向き合い、決して諦めることなく自分を信じ続けてください。そうして様々な困難に打ち勝つことで、人間的魅力を磨いていってほしいと思います。

諦めずにいれば、必ず良いことがやってきます。たくさんの苦労を経験し、自分と向き合い、人間としての魅力が増した人の周りには、自然と多くの人が集まります。

たとえ困難に直面したとしても決してくじけず、自分の魅力を磨くチャンスだと思って乗り越えていってください。

皆さんが輝かしい魅力を持った医療人へと成長していかれることを心から願っています。

午後の部では、近隣の神田スクエアルーム、神田カンファレンスルーム、ベルサール神保町の会場に分かれて、ディスカッション形式のオリエンテーションを行いました。



相部博子先生、大内裕香先生、会田愛子先生の3名の講師陣によって、医療者としての印象マネジメントや組織人に必要な意識、チーム力向上のための仕事の進め方、コミュニケーションスキル、e-mailのマナーについての研修が行われました。



研修2日目では、医療者にふさわしい言葉遣いや電話対応、高齢者への接し方などについて学び、新たな知見やスキルをインプットする経験を積んでもらいました。

